

『隋丁道護書啓法寺碑』が出版された前後の
羅振玉と内藤湖南

— 書簡・題跋にみる初期民国および大正日本の「伝古」精神と技術

陶 徳 民

The Spirit and Technology for Preserving Antiquities in Early
Republican China and Taishō Japan:
An Analysis of Relevant Correspondences, Prefaces and
Postscripts Written by Luo Zhenyu and Naitō Konan

TAO De-min

In the first decade of the 20th century, a large number of China's cultural relics were brought and sold to the West and Japan due to the Boxer War and the collapse of the Qing dynasty. In the meantime, both of Japan and China began to adopt the "collotype" technology from the West in order to preserve the original images of those cultural relics, especially the fine calligraphic and pictorial works. In order to restore and pass down the cultural tradition to the generations to come, Luo Zhenyu and Naitō Konan made great efforts in the period of early Republican China and Taishō Japan, especially when the *Sui Ding Daohu shu Qifa-si Bei* was published in the early 1920s in Japan. The present paper aims at clarifying their spirit of transmitting the antiquity and their preference of utilizing the "collotype" technology through an examination of the correspondences, prefaces and postscripts written by the two scholars.

キーワード：羅振玉 (Luo Zhenyu), 内藤湖南 (Naitō Konan), 隋丁道護書啓法寺碑 (*Sui Ding Daohu shu Qifa-si Bei*), 伝古 (transmitting the antiquity), 玻璃版 (collotype)。

1 大正日本に出版された『隋丁道護書啓法寺碑』と羅振玉・内藤湖南の関連論述

2013年3月出版の拙著『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承——関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に』の巻頭論文で、内藤湖南（1866—1934）の南帖北碑論について考察したことがある。そこでは、1913年から1932年までの20年間における内藤の論述に顕著な変化が起きたことを指摘し、変化の原因については、彼の老成すなわちより多くの文物を目撃できた結果、見識もさらに広くなり、論説もより洗練されていったのではないかと考えていた。言い換えれば、1913年に『景印唐拓十七帖』（『湖南文存』巻六）に跋文を書いた際に、「余於書法一意瓣香右軍、雖有阮文達諸人抑南揚北之論、獨余篤信不移、甘爲右軍僕役」（私は書法において王羲之のひとりのみを景仰している。阮元（号は芸台、諡は文達）が抑南揚北論を唱えたにもかかわらず、私一人が王羲之を深く信じて疑わず、王の召使いになることに甘んじる）と述べて、王羲之の正統性を唱える一方、阮元らの南北書派論に一種の反発を示している。ところが1932年になると、「書法の変遷について」と題する平安書道会講演において、阮元らの唱えた南北書派の分派論の正当性を根本的に否定したのである。その論説は以下のとおりである。

系統を調べて見ますと、南北の書派に関する阮元の議論なんかも忽ちはっきり分つて來まして、先程申しました丁道護の啓法寺の碑などといふものは、これは今の始興忠武王蕭儻碑の系統を引いて居りまして、それからやはり智永の千字文に関係をもつて居る南派の書風であつたといふことが分ります。さうするといふと、南派の書風だと片端から阮元などが片付けて居つた虞世南の廟堂碑なんかにしても、北派の中に胡昭儀の墓誌といひ、それから高昇彦の造像といふやうなものがあつて、相類したものがあり、必ずしも王羲之の書風を受けたばかりではないといふことを大体考へられます。これまで色々よい加減に片付けて居つた議論が、これから以後の研究によって、大体まあ一変されるだらうといふことを私は考へるのであります。¹⁾

内藤の晩年の所論が、実は王國維と羅振玉が書いた南北書派論に関連する書論に基づくものではないかと考えている。今年3月出版の『もう一つの内藤湖南像——関西大学内藤文庫探索二十年』でこの点について加筆した。王國維の持論は「梁虞思美造象跋」（壬戌1922年）という文に見られ、その内容は以下のとおりである。

1) 『東光』第四号（一九四六年）。

阮文達公作「南北書派論」、世人推為創見。然世所傳北人書皆碑碣、南人書多簡尺、北人簡尺世無一字伝者。然敦煌所出蕭涼草書札、與義獻（王羲之・王献之）規摹亦不甚遠、南朝碑板則如「始興忠武王碑」之雄勁、「瘞鶴銘」之浩逸、與北碑自是一家眷屬也。此造象若不著年號地名、又誰能知為梁朝物耶。不知文達見此又將何說也。²⁾

（阮元は「南北書派論」を著し、世の人々はその文章は創見に富むと推奨している。しかし、世に伝わってきた北朝の書はすべて碑碣であるのに対して、南朝の書の多くは書簡である。北朝の書簡は、一文字すらも現存していない。しかし、敦煌で発見された蕭涼の草書札は、王羲之と王献之の書風とあまり離れてはいない。南朝の碑板は、「始興忠武王碑」のような雄勁さ、「瘞鶴銘」のような浩逸さにおいては、北碑の書に非常に類似している。もし年号や地名が書かれていなければ、この造像は梁の時代のものだと誰がわかるだろうか。阮元がこれを見たら何と云うのだろうか。）

つまり、敦煌で出土した蕭涼の草書札は、二王の書風とよく似ている一方、梁の時代の碑である「始興忠武王碑」（江蘇・上元）と「瘞鶴銘」（江蘇・鎮江）も、明らかに北碑と同じ系統のものであるという。羅振玉が所蔵しているこの碑板二枚は、年号と地名が明記されているので信憑性は高いが、阮元はそれらを見ることはできなかった。そうでなければ、阮元は軽率に南北書派論を唱えることもなかっただろう、と。

羅振玉はさらに、『隋丁道護書啓法寺碑の跋文』で次のように論じている。

自阮文達公倡南北書派論、謂東晉宋齊梁陳為南派、趙燕魏齊周隋為北派；南派由鍾衛及義獻僧虔、以至智永虞世南、北派由鍾衛索靖至丁道護等、以至歐褚。此論既出、當世莫不宗之。予以為時有先後、書有工拙、則有之；而謂南北分派、則未允也。（中略）予意自東晉至隋唐、中間二百餘年、楷法實以漸進步、逮隋而大成、初唐之歐虞褚薛、皆生於隋代、丁道護與諸賢同為楷法宗匠。必以丁歐為北派、伯施為南派、殆非通論矣。丁道護書名烜赫當時、而宋時著錄、僅啓法寺一碑、而此碑拓本、自賈相藏後、屢經世變、孤本幸存、若有鬼神呵護。予故不惜遠道郵寄海東、選工精印、視原本不殊銖黍、以伝之藝林、並記楷法至於隋唐而始大成、書法非因南北而有同異、以訂正文達之說、並願與宇內宏達共論定之。甲子仲夏、上虞羅振玉、書於津沽寓居之聳硯齋。³⁾

2) 王國維「梁虞思美造象跋」、『觀堂集林附別集四』（中華書局、1959年）、1221頁。

3) 『隋丁道護書啓法寺碑』（博文堂合資会社、大正13年初版）の初版には羅振玉の跋文が付いておらず、それは再版の際に付加されたのであるという説もある。しかし、最近、東洋文庫所蔵の初版を実見する機会

阮元に「北派の書家」と誤認された丁道護は安徽の人、「初唐の三大家」の欧陽詢・虞世南・褚遂良および薛稷と同じく隋時代に生まれた楷書に長じる高名な書家であり、その傑作「啓法寺碑」（所在は湖北襄陽）の端麗な楷書が北宋時代の欧陽脩、蔡襄、米芾などに高く評価されていた。同碑の貴重な拓本は偶然に生き残っているため、1924年当時天津在住の羅振玉はその真蹟の精彩をリアルに再現させるために、わざわざ大阪の博文堂にコロタイプによる影印を依頼し出版した。この影印本は、湖南が当然寓目しただろう。四半世紀にわたる交流を続けている斯界の権威である羅振玉および王國維両氏の高い学識に対する全幅の信頼が、湖南にその南帖北碑論に上記のような著しい論調の変遷をもたらしたと言えよう。

実際には、『羅振玉王國維往來書信』（羅振玉と王國維の往復書簡）にある下記の書簡二通から、啓法寺碑は1924年6月（甲子。大正十三年、民国十三年）に日本で出版されたものだが、羅振玉はすでに前年の夏から秋にかけて、その出版計画を立てて、実行に移そうとしていたことがわかる。

羅振玉致王國維（1923年8月31日）

（前略）楫先至今未來、所照啓法寺碑玻璃片、擬仍在海東制板、若來津時、請攜來爲叩。
（楫先はいまなお来ておらず。彼が撮影した啓法寺碑の写真ガラス原板は、依然として日本で製版しようと考えております。もしあなたが天津に来るならば、どうかそれを携えてきてください。）

弟玉再拜 廿日⁴⁾

羅振玉致王國維（1923年11月3日）

又楫先代照之啓法寺碑玻璃片、請交博文主人、仍托小林印之。請眇告楫先爲荷。此請道安。
（楫先に撮ってもらった啓法寺碑の写真ガラス原板は、博文主人に渡してください。また小林に製版して印刷してもらうことを頼みました。）

弟玉再拜 廿五夕⁵⁾

を得て、羅振玉の跋文が既に含まれていることが確認できた。菅野智明教授の所論は、『近代碑学の書論史的研究』（研文出版、2011年）第7章、第8章および「[帖学期] [碑学期] 再考——清代に著された書法史論の高潮期について」（『書論』40号、2014年）参照。

4) 王慶祥・蕭立文校註 羅繼祖審定『羅振玉王國維往來書信』（東方出版社、2000年）、586頁。

5) 同注4、『羅振玉王國維往來書信』、595頁。

ここで言及された楫先は、啓法寺碑の撮影を担当した佟濟煦（1884-1943、字は楫先）という満洲旗人出身の文化人で技術者でもあった。民国初期到北京の自宅に延光室という宮中所蔵の歴代名人書画の影印を行う出版社を設立し、国内の多くの書局及び大阪の博文堂と販売提携関係を結んでいた。その詳細は、拙文「拓本啓法寺碑在中日兩國間の流轉出版及其影響——兼論内藤湖南對羅振玉的阮元批判所作的響應——」⁶⁾を参照されたい。一方、羅振玉はコロタイプ（玻璃版）による拓本啓法寺碑の影印方法についていろいろ考えてみたようだが、最終的には、「郵寄海東、選工精印（海東に郵寄し、工を選び精印せしむ）」というように、拓本啓法寺碑の原本を日本に郵送し小林忠治郎に製版を依頼したのであった。

2 羅振玉・内藤湖南における「伝古」精神と「玻璃版」技術

羅振玉と内藤湖南は同じ1866年生まれの人同士であり、賢者は賢者を重んじるといってお互いのことを理解し合い、支え合っていた気持ちは言葉や表情の随所に溢れている。『隋丁道護書啓法寺碑』が出版される数ヶ月前に、羅振玉はまだ上海にいた王國維への手紙に、内藤湖南が胆石症の手術を受けようとしたことを極めて心配し、万が一手術が失敗すれば日本の漢学界の第一人者を失うことになるのではないかと恐れていると書いてある。

羅振玉致王國維（1923年4月4日）

有東友來、攜内藤博士書、謂患膽石病數月、當入院手術。膽石病即中國黃病、此非死症、而手術則甚危、作書止之。乃書未到而已入院、已受手術、受手術後病加劇。近又聞漸佳、然終可慮。湖南漢学、究爲彼中翹楚、若竟不起、亦可惜也。⁷⁾

（日本の友人が、内藤博士からの手紙を持ってやってきて、その手紙に「数ヶ月前から胆石症を患っているので、入院して手術を受けねばならない」と書いてあります。胆石症はつまり中国黄病で、罹ったら必ずしも死にいたる病気ではありません。一方、その手術の危険性が極めて高いので、私は手紙を送って彼を止めようと考えています。しかし、手紙が彼のところに届く前に、彼はすでに入院して、手術を受けました。しかしながら、手術後、彼の病気はさらにひどくなってきました。最近、彼はまた元気になってきたと聞いていますが、やはり常に彼のことを心配しています。湖南は、日本の漢学界で最も傑出した人物であるため、もし彼が倒れて快復しなかったら、それは非常に残念なことです。）

6) 『関西中国書画コレクション研究会設立10周年記念国際シンポジウム報告書：中国書画コレクションの时空』所収、関西中国書画コレクション研究会編集発行、2022年3月31日。

7) 同注4、『羅振玉王國維往來書信』、561頁。

ところが実は、羅振玉自身も還暦を迎えようとする年になっており、病気に悩まされることも多くなっていた。唐拓啓法寺碑の出版計画を進めているうちに、彼は、その時すでに遜帝の溥儀に「南書房行走」に任命されたため北京に移っていた王國維に、「連日爲痔所苦、一事不能作、惟佐家人料理俗事而已。(私は連日痔で悩んでおり、何もできず、家族の雑事を手伝うことしかできません。)」(1923年10月4日)⁸⁾といい、また、「弟因牙痛至醫院拔牙、醫室奇熱、待醫久許、傷風有加、今尚未愈、愈後方能至京。(弟が歯痛で拔牙するために病院に行ったら、診察室がものすごく暑かったのです。そこで長時間で待っていたら、風邪も引きました。今なお快復しておらず、病気が快復するまでは、北京には行けません。)」(1923年11月8日)⁹⁾、と告白している。

関西大学図書館内藤文庫で保管されている内藤書簡は、湖南家族のものを除き、内藤自身に関わる書簡の大半が内藤の受け取った手紙である。にもかかわらず、前述した羅振玉の手紙に言及されている「東友」が持ってきた「内藤博士書」の万年筆の草稿が、なんと保存されているのである。その草稿の内容は「湖南文存卷十六」に収録されているもの(1923年3月付)と比較すれば、異同なしと判明できる。

また、同時期に出版された『寶左龕文』(大正12年に京都で出版された)には、巻頭の感想文に次のような言説が記されている。

景薄桑榆、復罹篤疾。悲立言之未就、感賦命之有涯。搜檢篋衍、蒐羅詩筆、平生所存篇章無多、詩皆率作徒勞應酬、筆於經術竟少發明、重席大学虚糜厚俸廿年、所樹足增慙惡。因在病間、自編敘目、屬鬯龕神田君論次成帙、又命小兒輩排印付刊、就正交友。併誥從游二三子噫、鑒吾貽伊悔、須及早努力耳。大正十二年春分日、書於京都帝國大学醫院第九病捨。明日將賴豬子、烏瀉兩醫博之神技、截開腸腹抉出膽石也。¹⁰⁾

『寶左龕文』に収録された序跋二十五篇は、「神田氏藏古鈔尚書跋」、「岩崎男藏古鈔尚書跋」、「清朝書畫譜序」、「上野氏藏唐鈔王勃集殘卷跋」、「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷跋」などがある。どうやら、内藤自身も、手術が失敗する可能性があるとして十分に承知していたようで、そのため、彼は手術前に高弟の神田喜一郎に文集編集の協力を依頼し、長男に出版業者への連絡をしてもらい、もし手術が失敗したならば、その場合はこの文集を自分の遺作あるいは伝世の著作とし

8) 同注4、『羅振玉王國維往來書信』、592頁。

9) 同注4、『羅振玉王國維往來書信』、596頁。

10) 『寶左龕文』、『内藤湖南全集』第十四卷所収、3-4頁。

て、できるだけ早く出版するよう手配していたようである。また、彼は弟子の何人かに、自分の教訓を汲み取って、できれば早めに努力して何か大きな功績を残すように、と言いつけている。その感想文で最も注目すべきは、「悲立言之未就、感賦命之有涯。(立言の未だ就さざるを悲しみ、賦命の涯り有りに感ず。)」という一句である。なぜならば、この一句は、東アジアの文人儒者としての最高の人格理想、すなわち立德、立功、立言のいわゆる「三不朽」の理想を見事に表現しているからである。しかし、この理想を実現できるのは決して容易なことではない。歴史上では、王陽明や曾國藩といったごく少数の人物だけがそれを成し遂げられて、また彼らの功績が後世にも認められている。仮にそのうちの「立言」だけを実現させようとしても、天の時、地の利、人の和という外的な条件が揃うほか、人の寿命も重要な要素であるから、いわば、至難の技である。

しかし、幾多の困難があっても、文人儒者は決して不朽の名声を追求することを容易に諦めないのである。内藤は正にそうであり、羅振玉もそうである。内藤が上記の感想文を書いてから3ヶ月余りの1922年の春分の日、つまり同年の3月21日に、羅振玉は王國維に自分の伝古の志を伝えている。

羅振玉致王國維 (1922年6月15日)

昨獨坐思維、世事一無可爲、不如專力伝古。本朝國史自是將來一大問題、而私史無從著手。故弟於此次庫籍、不惜毀家以求之、然世短意多、若不爲流傳、我生以後、誰任此者？故擬爲『史料月刊』、其詳見致乙丈書中、請公閱後轉交。若乙丈能謀之、翰怡菊笙諸人能出資任此、弟矢畢生之力以佐之。明知未必可行、意之所至、姑妄言之。宇宙之寬、人類之眾、而懷此痴願者、則在無一稜之田、一月之蓄之下走、能無長喟耶。此請 箸安。

弟期玉再拜 廿夕¹¹⁾

この「庫籍」とは、紙パルプに転用するため処分される予定であった清朝内閣に保存された档案文書8000袋のことで、羅振玉は北京や天津あたりで資金を募り、最終的には元値の三倍の価格で業者からそれらを買収したという。王國維と内藤湖南が彼のこの事蹟を称賛し、高く評価している。王國維は「内閣雜紙(史料)竟獲保存、快慰快慰。主此事除公外、舉世誰肯爲之者？即令人不出一錢、但整理一番、恐亦無此勇氣也。(内閣の史料は意外にも保存できました。これを聞いてほっとして喜びにたえません。世の中には、あなた以外に、誰にこのような

11) 同注4、『羅振玉王國維往來書信』、534頁。

仕事をやってもらえるのでしょうか？たとえ一銭も払わずに、ただ誰かにそれらを整理させてもらうだけだとしても、おそらくあなたのような勇気のある人物はいないのではないかと思います。）」¹²⁾と言っている。内藤湖南は「聞頃有購庫書之事、存十一朝之掌故、守三百歳之舊聞、甚盛事也、方今之世雖多遺逸、誰若公之篤誠乎。」(先日、あなたが庫書を購入したことを聞きました。十一朝の歴史典故や三百年の逸話を残すことができたのは、非常に大きな業績です。今の世の中には有能な逸材は多いですが、あなたのような篤実な人はいないだろう)¹³⁾と述べた。

この手紙の中に触れている「乙丈」は沈曾植で、「翰怡」は劉承乾で、「菊笙」は張元済のことである。彼らは全て当時の学術界及び出版業界における最も重要な人物であった。1919年6月に、羅振玉が八年間の京都滞在生活に終止符を打って中国に戻ってきた。それからもうすぐ三年が経過しようとしていた頃に、彼はこの三人の力を借りて『史料月刊』を創刊し、海のような膨大な史料から得られた文章を徐々に世に公開しようと考えている。また、彼は『元朝秘史』よりも史料価値が高い」とみなされていたモンゴル語の「西遼史書」を翻訳しようとするほかに¹⁴⁾、『國朝官印集録』を編集して出版しようとも考えている¹⁵⁾。

いわゆる「世事一無可爲、不如專力伝古。(世事に一つ爲すべきことも無くんば、力を伝古に専らにするに如かず。）」というのは、まさに羅振玉の当時の心情と意志を反映した言葉である。つまり、民國初期の混沌たる政治情勢に対して、羅振玉は自分がどうすることもできないという無力さを痛感し、政治に関与することを断念した。それならば、むしろ古籍に没頭し、その内容を整理し、古籍の編纂と印刷事業に専念することによって、古代の文物や歴史を後世に伝えることのほうが増した、と考えるようになった。案の定、約二年後の1924年の夏に、彼は王國維に自分の近況を次のように伝えた、「所印各書、『史料初編』廿二種、『魏書宗室傳注』十二卷、及『敦煌零拾』、均已印成、各寄一部、交廠肆古光閣主人周希丁攜京、恐渠未必肯送、公飭人往取可也。(印刷予定のある書籍には、『史料初編』二十二種、『魏書宗室傳注』十二卷、及び『敦煌零拾』はすでに印刷ができました。それぞれ一部をそちらに送らせていただきます。工場の古光閣主人である周希丁にそれらを渡して北京に携えて行ってもらいましたが、彼がそちら(王國維)に持っていきたくないという可能性があるのを心配しているので、人を取りに

12) 王國維致羅振玉(1922年5月13日)、同注4、『羅振玉王國維往來書信』、532頁。詳細は王國維「庫書樓記」(1922年)、(『觀堂集林』卷十九所收)を参照。

13) 内藤湖南「與羅叔言」、『湖南文存卷十六』所收(1923年3月)、全集第十四卷、260頁。

14) 羅振玉致王國維(1922年6月22日)、同注4、『羅振玉王國維往來書信』、534頁。

15) 「本朝官印、刻影摹二百餘、知實分五期。初期用篆、二期滿洲楷書、三期漢篆、四期漢篆滿楷、五期漢篆滿篆、六期漢篆及滿楷滿篆。使不得見大庫史籍、無從知之、更無從摹取。」羅振玉致王國維(1922年6月)、同注4、『羅振玉王國維往來書信』、537頁。

行かせたほうが良いようである。』¹⁶⁾とある。もちろん、羅振玉のこの二年間の成果はこれだけではない。

これに先立ち、王國維は「庫書樓記」に、羅振玉の空前絶後の「伝古の功」について以下のように述べている。文中には、彼は羅振玉を「參事」と呼んでいるが、これは羅振玉が清末に勤めた学部の官職の名称で、ここからも羅振玉の志が示されているとわかる。

參事夙以收藏雄海内、其天津之嘉樂里第、有殷時甲骨數萬枚、古器物數千品、魏晉以降碑誌數十石、金石拓本及經籍各數萬種、實三古文化學術之淵藪。今者又得此大庫之書、宸翰之樓、大雲之庫與斯樓鼎峙北海濱。……雖然、參事固不徒以收藏名家者也、其於所得之殷墟文字、固已編之、印之、考之、釋之、其他若『流沙墜簡』、若『鳴沙石室古佚書』等、凡數十種、先後繼出、傳古之功、求之古今人、未見其比。¹⁷⁾

(參事はずっと前から收藏品の豊富さによって天下に傑出している。その天津の嘉樂里にある邸宅には、殷時代の甲骨数万枚、古器物数千個、魏晉以後の碑文や墓誌は数十部、金石拓本と經典古籍はそれぞれ数万種あり、誠に古代文化學術の集まる場所と言える。今はさらにこの清朝内府の文書、天子の親筆を手に入れた。……しかしながら、參事はただ収蔵の豊富さだけで世に知られる人物ではない。手に入れた殷墟の甲骨文がすでに編纂・印刷・考証・解釈されていた。そのほかの文物については、例えば、『流沙墜簡』や『鳴沙石室古佚書』など凡そ数十種類の書物も、前後して出版された。參事の伝古の功績は、古今の人々と比べても匹敵する人物はいないだろう。)

また、羅振玉自身も、以前から何度も自分が伝古に熱心に取り組む気持ちを言い表したことがある。この伝古については二つの問題がある。一つ目はなぜ伝古するのか、二つ目はいかに伝古するのか、ということである。

なぜ伝古するのかという問題については、羅振玉が京都に移居して二年目の年末、つまり旧暦1912年12月26日に書いた「殷墟書契前編叙」にある以下の言説から読み取れるだろう。

天既出神物於斯文垂喪之時、而予又以偷生視息之餘、倉皇編輯、須鬢日改、犬馬之齒亦既四十有七。上距己亥已閱十有四年、買地洹陽之願既虛、茫茫斯世、知誰復有讀吾書者、亦

16) 羅振玉致王國維 (1924年7月21日)、同注4、『羅振玉王國維往來書信』、630頁。

17) 王國維「庫書樓記」、『觀堂集林』卷十九所收。

且抱此遺文以自慰藉而已。窮冬濡豪、萬感百憂一時交集。¹⁸⁾

つまり、自分は（当時）もうすぐ47歳になるが、初めて殷墟の甲骨文字を知ってからもう十四年が経過したにもかかわらず、自分が甲骨文字の編纂・出版及び研究の面では何一つ成果を上げられていないので、恥ずかしくてたまらなかったという。注目すべきは、この本に内藤湖南の題箋があること、本の扉にはタイトルである「殷墟書契」という大きな四文字以外に、「内藤虎署」という四つの小さな文字も書かれていることである。ここから見れば、内藤がきっとこの羅振玉の序文を入念に読んだだろうと考えられ、また当時の羅振玉の大きな抱負と哀愁の気持ちに深く心を動かされたのではないかと思われる。上文で紹介した『寶左龕文』の巻頭の感想文の、人生はあまりにも短く、手術が失敗したら自分の著述が後世に伝えられないことを恐れていると述べた内藤の不安は、羅振玉のこの矛盾の心境とは酷似しているものだったといえよう。

翌年、つまり旧暦1913年9月23日に、羅振玉は「鳴沙石室佚書敘」でさらに次のように述べている。

古人有言、名世之生期以五百。神物出世且數倍之。即時會幸至而我生不辰。今則大卜所掌、若詔予以典守。荒裔寶藏亦並世而重開、此可欣者一也。

嗚呼、天不出神物於乾嘉隆盛之時、而見於國勢凌遲之日。今且赤縣崩淪、禮亡樂斃、澄清之事期以百年。而予顧汲汲爲此、急若捕亡。揆以時勢、無乃至愚。而冥行孤往志不可奪。¹⁹⁾

と嘆じた。つまり、殷墟の甲骨文字と敦煌文書の発見とともに、この三千年以来の奇跡であると言えよう。そして、自分がたまたまこの時期に生まれてきたので、一種の歴史的使命感を感じたのである。特に、清朝の滅亡により禮樂が崩壊してしまったのに鑑みて、清朝に仕えた元臣下として、伝古の困難や無理を知りながら、その理想を追わなければならない気持ちがかえって強くなったのであるという。

また、如何に伝古するのかとは、つまり羅振玉がいかに伝古の方法や技術を重視していたのかということである。この点については、彼が日本に滞在していた初期の著述にその一端が窺える。『鳴沙石室佚書』の題箋は、羅振玉自身が隷書で書いたものであるが、その本の扉にある

18) 羅振玉『殷墟書契前編』巻首叙言。東洋文庫藏本。

19) 羅振玉『鳴沙石室佚書』巻頭叙言。東洋文庫藏本。

六文字は篆書で書いているのである。敘文の後に、長方形の印鑑が見えるが、その文字は「歳在癸丑 託日本京都小林忠次郎精製玻璃版印一百部 翻刻必究 永慕園主人記」（この句読を示すためのスペースは筆者が付けたものである）とある。

同年「癸丑重九後五日」（1913年旧暦9月14日）に作成された『齊魯封泥集存』の序文で、羅振玉は「是編所載、爲數四百有奇。視陳、吳前錄雖畧減、而以玻璃板精印、濃淡逼真、不異出之氈墨、則遠勝之。」と強調している。つまり、陳介祺と吳式芬が共同で編纂した『封泥考略』と比較すれば、『齊魯封泥集存』に収録された印鑑の数はやや少ないものの、『封泥考略』は「石印未精（石印は未だ精緻ならず）」というのに対して、『齊魯封泥集存』は「玻璃板精印」としている。「伝古」の古物をそのまま本物そっくり表現できるという精度の面においては、両書を同じように扱うことはできないという。

もし、羅振玉が内藤湖南の紹介で、はじめて小林忠治郎にコロタイプによる古籍の印刷を依頼したのが1913年だとすると、この二人の協力関係は少なくとも1930年代まで続いたことになるだろう²⁰⁾。同年3月に東方文化学院によって出版された宋版『毛詩正義』も小林が製版したもので、そこに「内藤湖南博士遺愛、内藤乾吉藏、日本國寶本景印」と記されている。また、この両者の間に、すなわち1924年に出版された景印啓法寺碑は、前述の通り、羅振玉が1923年11月3日付の王國維宛の書簡の中で、「啓法寺碑玻璃片、請交博文主人。仍托小林印之。」と説いている。ここからも、羅振玉の小林への信頼が終始変わらなかったことが分かる。

小林忠治郎（1869-1951）の生涯に関しては、知る人はそう多くない、また関連研究も少ないようである。彼の出身地の埼玉県行田市にある郷土博物館が2021年に出版した『原田莊左衛門家資料目録』（3月31日）及び図録『近代日本の写真と出版——原田家と小川一真——』（7月3日）には、小林の略歴に関する貴重な記述がある。²¹⁾

明治2年 原田庄左衛門（初代）の三男として生まれる（原田徳三郎）

長兄は原田清太郎（二代目庄左衛門）、次兄は小川一真。

20) 陶徳民・藤田高夫「内藤書簡研究の新しい展開可能性について——満洲建国後の石原莞爾・羅振玉との協働を例に——」（関西大学『東西学術研究紀要』第47輯、2014年3月）、また、瞿艶丹「小林写真製版所と満洲国の出版史：『大清歴朝実録』の複製出版を中心に」（口頭発表、2018年）参照。

21) 行田市郷土博物館の鈴木紀三雄館長より貴重なご指摘をいただきましたので、感謝を申し上げます。図録『近代日本の写真と出版——原田家と小川一真——』（行田市郷土博物館発行、2021年）、佐藤進「董康日記に見る小林忠治郎」（二松学舎大学大学院紀要『二松』、2009年3月）、同氏「珂羅版之路の開拓者小林忠治郎」（王勇編『書籍之路與文化交流』所収、上海辭書出版社、2009年12月）参照。

明治33年 アメリカへ3年半の留学へ行く。

明治38年 京都で小林写真製版所を開業（養父の名前は不詳、洋品店を営んでいた）。

小林は、次兄の小川一眞（1860-1929）に比べると、はるかに知名度が低い人物である。1882年にアメリカに留学した小川は、写真製版術を日本に導入して、写真製版界の第一人者と広く知られている。彼は洋画家の黒田清輝とともに1910年に帝室技芸員の称号を授与された。また、美術雑誌『國華』の創刊と刊行も小川とも密接な関係にあった²²⁾。それぞれ養子となって別の姓を名乗ったため、その兄弟関係は非常に分かりにくい。実際、関西での書畫美術出版への小林の貢献度は非常に高かったと考えられる。また、長兄原田清太郎（1855年-1938年）とその次男の油谷達（1886年-1969年）、三男の耕三、四男の興家、五男の原田悟朗（1892-1980年）などが大阪で再興した博文堂（明治末期から大正初期までの間に「油谷博文堂」と称されたが、1915年一旦「博文堂合資會社」と改名、1922年には正式の社名として用いられるようになった）の出版活動とも密接な関係がある。²³⁾

東京から大阪に本拠地を移した後の原田博文堂の事業は、美術出版と中国書画の販売が中心であった。美術出版は小林写真製版所の優れた技術に支えられていた。中国書画の販売に関しては、原田悟朗（羅振玉が王国維に宛てた書簡で「博文主人」として言及されている）は日中間の頻繁な往來を商機とし、さらには内藤湖南、羅振玉、長尾雨山などの専門家が彼によく助言し、協力してあげた。多くの名品を生み出したその協力関係は、近代日中文化交流史上の美談の一つと言っても決して過言ではない。これは「英雄が時勢を造る」と解釈すべきか、それとも「時勢が英雄を造る」と解釈すべきか、おそらくその両方になるだろう。

【謝辞】

本稿は、2021年10月16日関西中国書画コレクション研究会が主催の国際シンポジウム「中国書画コレクションの時空」（京都・泉屋博古館 オンライン併用）での報告の一部を加筆したものである。報告の準備過程で、引用文の翻訳作業は京都大学大学院文学研究科特別研究員王歆氏の協力を得た。記して御礼を申し上げる。なお、同報告にもとづいて書かれたもう一本の論文、「拓本啓法寺碑在中日兩國間的流轉

22) 小川一眞については、郡山幸男、馬渡力編『明治大正日本印刷術史』79-83頁（中山久四郎『世界印刷通史』所収、三秀社、1930年）、印刷博物誌編纂委員会（樺山紘一編集長）編『印刷博物誌』474-475頁（凸版印刷株式会社、2001年）、吉田（岡塚）章子『小川一眞研究：撮影・印刷・出版 近代日本と写真』（2016年筑波大学博士論文）参照。

23) 西上実「油谷達と博文堂」そのコロタイプ美術出版について」（『美術フォーラム21』26號、2012年）、稲岡勝「原田博文堂の事業失墜と再興の歩み：北原九十郎、油谷達・原田悟朗兄弟のこと」（『書物・出版と社會変容』（第20號、2016年3月））。

出版及其影響一兼論内藤湖南對羅振玉的阮元批判所作的響應」(関西中国書画コレクション研究会設立10周年記念国際シンポジウム報告書『中国書画コレクションの時空』所収、2022年3月)もあり、併せてご参照いただければ幸いです。



図1 右より小川一眞、小川夫人、原田清太郎、小林忠治郎

『近代日本の写真と出版—原田家と小川一眞』
(行田市郷土博物館発行、2021年)より

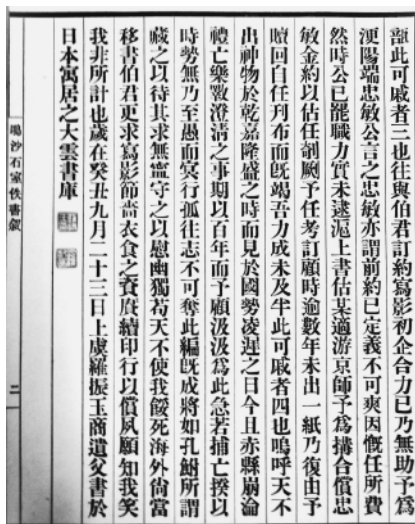


図2 羅振玉「鳴沙石室佚書叙」、東洋文庫蔵
文中の「伯君」はペリオ(中国名、伯希和)、「端忠敏公」は端方を指す。

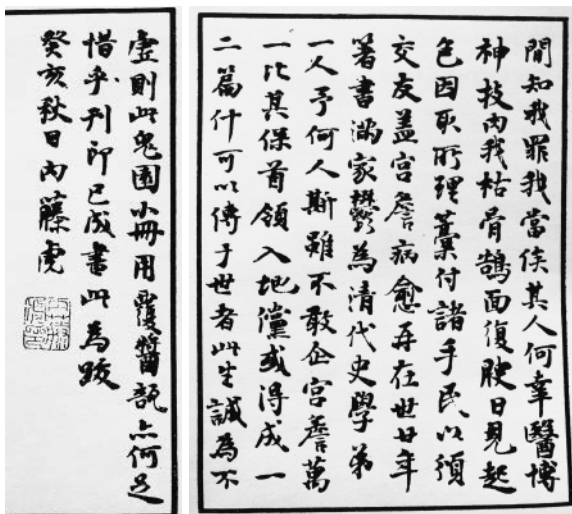


図3-2 内藤湖南「寶左蠶文跋」の一部 出典同図3-1
文中の「宮詹」は宮中の「少詹事」という役職の経験者、錢大昕を指す。

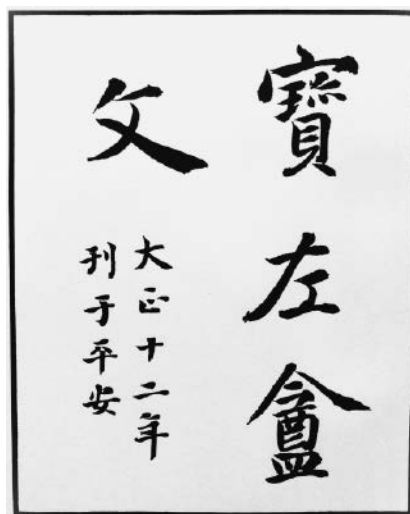


図3-1 内藤湖南『寶左蠶文』扉
『内藤湖南全集』第十四巻より

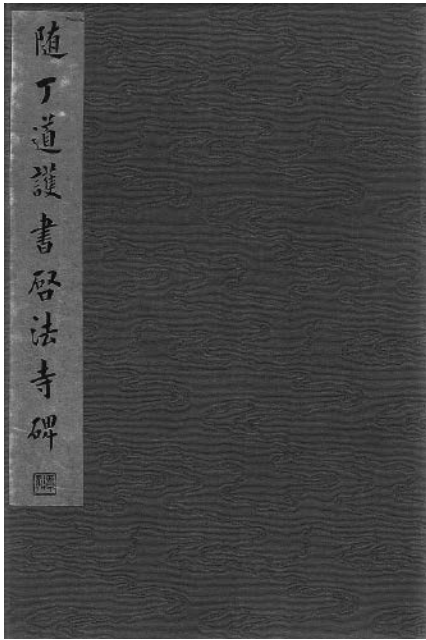


図 4-1 『隋丁道護書啓法寺碑』
関西大学図書館蔵

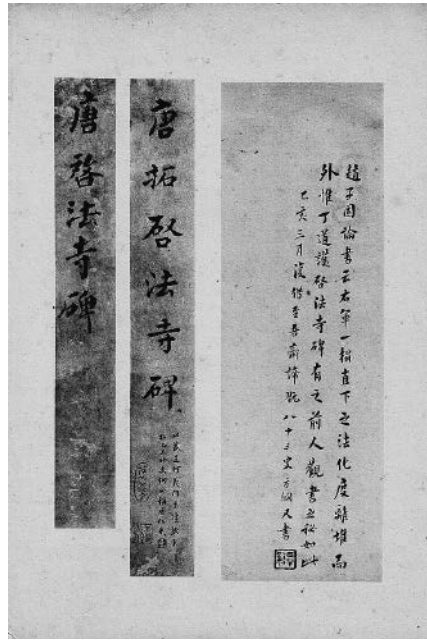


図 4-2 翁方綱の観記

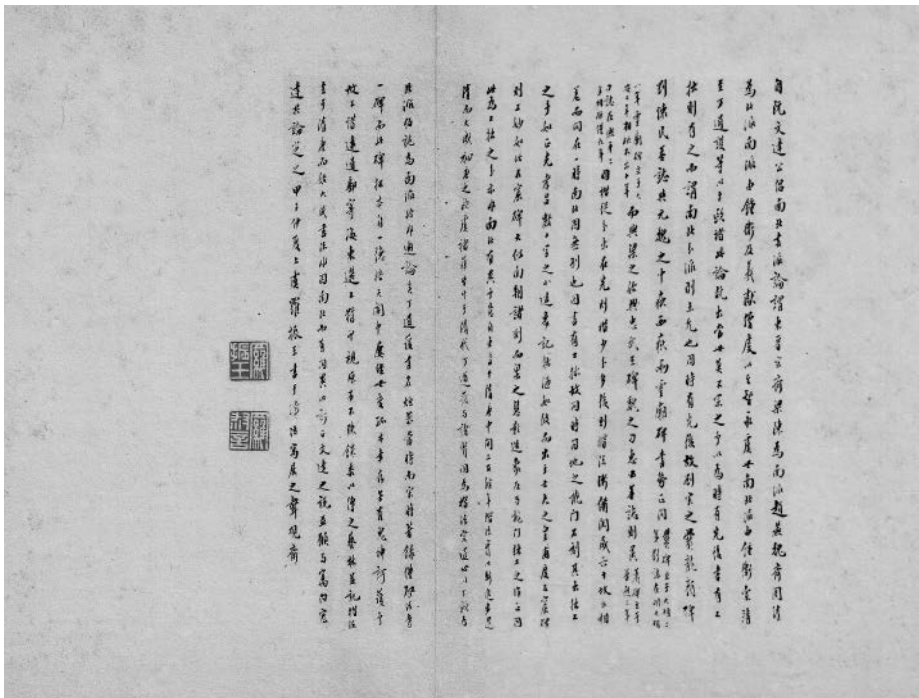


図 4-3 羅振玉の跋文